

化学工学会粒子・流体プロセス部会平成 21 年度第 2 回幹事会 議事録

開催日： 平成 22 年 3 月 17 日（水） 17:30-20:10

場所： 鹿児島大学郡元キャンパス 大学会館 1 階 喫茶ガロア

出席： 合計 17 名

【現役員より 11 名】

堀尾（部会長）、甲斐（副部会長、事務局長）、上ノ山（副部会長）、鈴木洋（熱物質代表）
鈴木善（流動層代表）、藤本（粉体代表空閑代理）、幡野（企画幹事）、大村（企画幹事）、
上山（監事）、塩原（監事）、中里（事務局次長）

【新役員より 6 名】

太田（熱物質新代表）、梶原（ミキシング新代表）、西岡（ミキシング新副代表）、桑木（流動層副代表）、後藤（粉体新代表）、加納（新事務局長）

審議事項：

平成 21 年度決算について

・甲斐事務局長より、平成 21 年度決算案について説明があった。今回の収支計算書では、事務局としてのお金の出入りを明確にするため、事務局を一つの単位と見なし、9 月に各分科会に割り当てる割当金の 4 分の 1 に相当する額を事務局経費の収入（部会交付金収入）として分けて記載した事が報告された。決算案は原案通り承認された。

行事積立金取扱規則の修正について

・各分科会の行事積立金取扱規則の修正版を 2 月末に提出したことが甲斐事務局長より報告された。これは行事や事業を遂行するための資金（第 2 条）の記述を具体的に 2 項目に絞るよう文科省より要請されたことによる。特に流動層分科会は、抵触上限に近い額を留保しているため、積極的に分科会・部会の発展になるような企画を作り、有効活用していくよう、堀尾部会長より要請があった。

平成 22 年度予算について

・甲斐事務局長より、昨年 11 月に本部に提出した平成 22 年度予算の資料に基づき説明があった。予算案は原案通り承認された。

部会セミナーで赤字が出た場合について

・甲斐事務局長より、部会セミナーが 2 年続けて赤字となったことを受け、部会セミナーで赤字が出た場合の対策についての対応案が提案された。審議の中で、これまでの部会事務局

の繰越金は部会セミナーでの2回の赤字と各種の授賞活動の活発化に充てられたことが示された。部会事務局経費については、繰越金の余裕があり、事務局での内部留保を増やさなため、従来秋季大会還付金を事務局経費に繰り込んでいたものを一時的に各分科会に分配してきたが、今後はその余裕はないことが確認された。部会共通の行事である部会セミナーについては、これからその本来の目的が達成できるよう体制を強化する一方、赤字が出た場合には各分科会の財政規模に比例して負担をしていただくこととなった。以上の審議の結果、以下の2点が了承された；

次年度以降、秋季大会還付金（20万円程度）を事務局収入に繰りこむこととする。

部会セミナーで赤字が出た場合、赤字分は各分科会が、次年度、それぞれの予算規模に比例して、負担するものとし、事務局が各分科会への割当金を分配する際差し引くものとする。

を明文化するため、部会セミナーの内規案を堀尾部会長が作り、幹事会マターで齋藤新部会長の方で次年度の幹事会にて諮り、赤字対策を実行していくこととなった。なお、現時点において内規は作成されていないが、平成21年度の部会セミナーの赤字に対しても、平成22年度の分科会への配分額を決定する際に、配分額に比例して各分科会の負担額を計算し、分配金からそれを差し引くこととすることが了承された。

部会幹事会役員の改選について

- ・加納新事務局長より、幹事会新役員案について説明があった。上ノ山副部会長、甲斐副部会長、竹田副部会長は留任、分科会代表（5名）・副代表（5名）は自動的に幹事会新役員となることが説明された。また新部会長推薦枠として亀井氏（ダイセル化学工業）、金子氏（栗本鐵工所）、所氏（早稲田大学）の3名に打診中であることが報告された。
- ・加納新事務局長より、新たに「若手・女性育成プロジェクト担当」の追加について提案があり、了承された。
- ・大村企画幹事および太田熱物質新代表より、IWPI 窓口担当（熱物質代表）が順次企画幹事の1人として残り今後もこのサイクルを回すよう、提案があった。審議の結果、このやり方を今後も踏襲することとし、鈴木熱物質現代表が企画幹事として加わることが承認された。
- ・新役員名簿が完成していないことから、部会総会までに現事務局と新事務局が協力して新役員名簿の作成に努め、可能な限り総会に諮ることとなった。

部会セミナーについて

- ・審議の結果、部会セミナーは部会企画として重要であり、収益性のある企画としても確立していくことを目指し、今後は部会セミナー担当として2人体制（2分科会）とすることとした。2分科会で持ち回りのローテーション体制、企業の研修の場としても活かせるような企画、セミナー名称の変更、熱物質流体工学セミナー（無料）との関係の明確化、場所・時

期の固定など、次の幹事会（秋季大会）までにしっかりとした議論をし、無理なら1年見送る覚悟で収益性のある良い企画を真面目に検討することとなった。

動画作品賞の名称変更について

中里事務局次長より、動画作品賞を動画賞と名称変更するための規程の修正案が示された。賞の記載は例えば「動画賞（研究作品）」のように部門をカッコ書きで示すこと、賞状を兼ねた楯の授与とすることが説明され、修正案の一部を訂正する形で総会に諮ることとなった。

平成22年度部会賞募集について

- ・中里事務局次長より、部会賞の募集・選考・決定の日程案について説明があった。年会で全ての部会賞の受賞講演が行えるよう、原案を予定として実施することとなった。
- ・技術賞について、今年応募がなかったため、次年度は積極的に応募を誘導していただくよう、堀尾部会長より強く要請があった。

第42回秋季大会（同志社大学）シンポジウムについて

・中里事務局次長より、資料に基づき、4つのシンポジウムを実施する予定であることが説明された。

・堀尾部会長より、熱物質流体工学分科会のシンポジウムの中に第二期に入る部会のあり方を部会制導入の初期の目的やビジョン2011に照らし合わせて議論する部会の目玉の企画を用意した旨、説明があった。企画の中身について、以下の提案があった。

- 1) アジアから留学生が来たくくなるような粒子流体プロセス部会を代表する部会にしていくにはどうしたらいいか。
- 2) 関連諸学会との共存の中で、部会の存在感をどう高めていくのか。
- 3) 化学工学会での横系（エネルギー部会、環境部会など）、縦系（粒子・流体プロセス部会、分離プロセス部会等）の構造をより発展させるような当部会の役割発揮の方向。）産官学の連携をどうするか、アプリケーションがないとお金が動かない中、基礎がどういうふうにかにつけたらいいのか。
- 5) 分科会名を分かりやすいものにする。

4について、うまくいっているのがミキシング、流動層は昔うまくいっていたが設備投資の問題で最近縮小気味、粉体プロセスは粉体工学会に遠慮している感がある。また、5の分科会名称についても、熱物質流体では全分科会の内容が入ってしまうし、気液固分散には流動層も入ってしまう。一応各分科会の役割分担が見える形の名称群になるよう、どこかで一度は議論した方がよい。この点については前部会長の上山監事からも話し合いをもつ時期に来たのかもしれないとの率直な感想があった。以上の観点から企画を考えていくので、是非ご協力いただきたい旨、堀尾部会長よりお願いがあった。

・上ノ山副部長より、動画賞対象シンポジウムを全シンポジウムに広げたらいいのではないかと提案があり、そのように事務局側でシンポジウム概要を修正し、秋季大会実行委員会に提出することとなった。その際、部会連絡担当者は新部長に変更することとした。また動画賞については、静止画を動画的に編集したものでも可能であることを会員に周知させることとなった。

報告事項：

部会・分科会の入会者・脱退者

・資料に基づき、会員数について堀尾部長より説明があった。法人の会員数において、脱会があるのに会員数が増えており、この食い違いについて事務局で確認することとなった。ミスがある場合は訂正して総会に提出することとなった。

化学工学会技術賞受賞者報告

堀尾部長より、部会の技術賞受賞者が学会の技術賞を受賞したことが報告された。

平成 21 年度部会賞受賞者

・上ノ山副部長より、資料に基づきシンポジウム賞（奨励賞、プレゼンテーション賞）、フロンティア賞、動画賞の受賞者について説明があった。フロンティア賞受賞者の受賞講演が今回の第 75 年会（鹿児島大学）に間に合わなかったため、第 42 回秋季大会（同志社大学）の講演プログラムの中で実施する予定であることが報告された。

・上ノ山副部長より、楯の大きさは順番にフロンティア賞（大）、シンポジウム賞（奨励賞）（中）、動画賞（小）としたことが報告された。

部会ホームページについて

堀尾部長より、竹田副部長の代理で資料に基づき説明があった。分科会英語名称の問題が決着できなかったため、次期幹事会で決着してほしいとの要請があった。

部会の継続申請について

前回の総会で確認済であるが、部会継続の再確認を行った。以前決めたスケジュールに基づき、今年度内にやれる手続きは現事務局で粛々で行うこととし、新事務局へ引き継ぐこととなった。

化学工学年鑑 2010 執筆者

堀尾部長より、資料に基づき説明があり、執筆者の確認がなされた。

部会・分科会の活動報告

- ・各分科会より、説明があった。

部会・分科会の活動計画

- ・各分科会より、説明があった。体質の強化にあたり、部会としてのプレゼンスが立つよう、それぞれの分科会で大きなシンポジウム、国際会議、JCEJ への Special Issue 企画（特に粉体プロセス分科会）、その他の雑誌への Special Issue 企画など、積極的に行うよう、堀尾部会長より要請があった。

その他

- ・幡野企画幹事より、技術賞内規案について時間の都合で説明できないことから、メールにて説明することとなった。